

プロレタリア

発行所・新世界通信 発行人・小川春夫

東京都足立区梅島2-38-11-303

TEL 03(3849)4953 FAX 03(3849)4938

郵便振替 00160-4-174947

E-mail ga3129@i.bekkoame.ne.jp

URL http://www.bekkoame.ne.jp/i/ga3129



▲ 未来は変えられる！ (東京・有明防災公園)

5月3日の日本国憲法施行78年の日、各地で改憲反対・憲法活かせ！の行動が展開された。晴天の東京では江東区有明防災公園で、「未来は変えられる！戦争ではなく平和な暮らし！主権は、平和と人権を！5・3憲法集会実行委。共催は、戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委など6団体。本集会は午後1時、総がかり実行・菱山南帆子さんの主催で挨拶が始まった。菱山さんは、「この

5月3日の日本国憲法施行78年の日、各地で改憲反対・憲法活かせ！の行動が展開された。晴天の東京では江東区有明防災公園で、「未来は変えられる！戦争ではなく平和な暮らし！主権は、平和と人権を！5・3憲法集会実行委。共催は、戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委など6団体。本集会は午後1時、総がかり実行・菱山南帆子さんの主催で挨拶が始まった。菱山さんは、「この

集会は、分断を乗り越えて開催した横浜3万人集会から10年。この連帯が2015年安保法制国会論争の爆発につながった。その後コロナ禍でも継続し、この力が改憲反対を止めてきた」とこれまでの成果を確認しつつ、「しかし今、世界は戦争と排外主義の危機にある。日本では台湾有事を口実に戦争態勢が作られ、沖縄米軍をはじめ性暴力が続いている。韓国は、女性とジェンダー平等の闘いが際立っている。私たちが大軍拡反対の新署名を始めた。7月参院選では、与野党逆転

世界の転変に9条活かせ

5・3憲法大集会に3万8千人

米トランプ政権は4月に入って、世界を相手に一律10%関税、対米黒字国ごとに追加関税と猶予期間、自動車25%関税、とくに中国には14.5%などの関税増徴を仕掛けてきた。ふっかけて取り引きという、米国内産業立て直しの絶望的試みであるが、同盟諸国関係と世界資本主義の危機を加速させている。問題は、このトランプ関税を「国難」とし、与野党賛同の国益国防ナショナリズムで乗り越えようとする日本のような従属的同盟諸国の政治状況にある。米国民は、差別排外主義と公共サービス切り捨てに抗議し、「手を引け！」と起ち上がった。日本人は、米国民と連帯し、汚い取り引きの己がブルジョア政権とこそ闘うべきだ。石破政権が、自動車のために農業を切り捨てるならば、政権打倒の火ぶたを切ろう！(編集部)

任案、やるべきはやります！」と野田代表がつくりの見栄を切った。集会後半は、佐藤学さん(安部法制廃止・立憲主義回復を求める市民連合)の連帯挨拶、各分野のリーディングと続いた。最後に、小和田義和さん(憲法共同センター)が、5月19日の行動等の行動提起をして終了。参加者は二つのパレードに出発した。総じて言うと、昨年まで続いた改憲発議阻止という守勢の闘いから、昨秋総選挙の転換を経て、9条実現の攻めに入った今年の大行動であった。(東京W通信員)

長、主催者挨拶が中島由美子さん(中小民間労組懇談会代表)から行なわれた。中島さんは、「今春閣内では大手で満額回答というが、中小・非正規には格差拡大だ。欧州では週休3日が広がりつつあるが、日本では労働時間規制が破壊されつつある。そして主食の小麦すら不安になる反面、43兆円の大軍拡だ」と現状を批判し、石破自公政権・財界との闘いを訴えた。連帯挨拶が、都労連委員長の中川崇さん、第96回中央メーデー(同日代々木公園で全労連などにより開催中)の実行委の黒澤幸一さんからなされた。両者とも、闘う統一メーデーの実現を求めた。



▲ 大阪・釜ヶ崎から戦争と排外主義に反対する！

望書」を突き付けた。最後は大阪城公園で、弁当を広げ、恒例となつて「カンパ」で闘いを締めくくった。今年も釜ヶ崎メーデーは、安心して働き生活できる釜ヶ崎のための諸要求とともに、戦争と排外主義に反対する諸課題を確認した。「全世界の労働者、人民、被抑圧民族と連帯して闘うぞ！」のスローガンの下、メーデーを大衆行動として闘い抜いた意義は大きい。戦争に向けて社会が大きく動き始める中、戦争と排外主義に反対し、差別・分断支配を打ち破り、団結を強めていく。大衆行動を強めていく。 (釜ヶ崎S)

5・1日比谷メーデー

5月1日快晴の午前第96回「日比谷メーデー」が都心で挙行され、日比谷野外音楽堂の内外に約3千人の労働組合員・市民が参加した。主催は、同メーデー実行委員会。

働く者の団結で生活と権利、平和と民主主義を守ろう！との恒例のスローガンのほか、今年大幅賃上げ実現！労基法解

体を許すな！社会保障の充実を！②ジェンダー平等！均等待遇実現！なくせ貧困・格差・差別！8時間働けば暮らせる社会を！③被災者支援！福島原発事故を忘れない！原発のない社会を！④反戦平和！核兵器廃絶！9条改憲反対！大軍拡・増税反対！辺野古新基地建設阻止！として掲げた。

開会宣言が鎌田博一さん(国労東京地本委員長)

来賓挨拶として、参院議員の大橋ゆうこさんが、沖縄の山城博治さんと共に登壇した。

韓国民主労総からのメッセーが披露された。民主労総・ギョンス委員長は、このかんの尹錥悦の大闘争での「道を開く」民主労総の役割について報告し、6月大統領選を踏まえた社

会大改革の闘争方針を語った。また、韓国工場屋上での籠城476日(最近1名が体調不良で降り1名が継続)など、日東電工に雇用継承を求める闘い(韓国OP闘争)について特に触れ、このかんの日本での支援に謝意を表した。

各課題からは、労働法制について榎本康子さん(雇用共同アクション)、今年1月、厚労省の労働基準法研究会が労基法のデロゲーション(適用除外)について報告書を出し、来年の労基法改悪が策されている。「労使自治」の名の下に、労基法の労働時間規制などを除外するものだ。

また、外国人労働者については、フィリピンさん(全統一アフリカユニオン)。反戦平和については、菱山南帆子さん(5・3憲法集会実行委)がアピールした。

後半国会は選択的夫婦別姓実現

後半国会で争点の諸法案が煮詰まってくるなか、4月の「19の日」行動が各地で取り組まれた。7月参院選を前にした後半国会で、与野党が争点としているものは、消費増税をはじめとする物価高対策、トランプ関税対策、能動的サイバー法案、選択的夫婦別姓制度、再審法改正などである。

東京では昼過ぎ、113回めの「19の日」行動が、「憲法いかせ！戦争できる国つくり反対！選択的夫婦別姓の実現を」The END自民党政治4・19議員会館前行動」として行なわれ、国会前に900名が参加した。主催は、戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委と9条改憲NO！全国市民アク

ション。行動は、戦争させない千人委員会・内田雅敏さんの主催者挨拶で開始。政府は台湾有事を主張し、琉球列島の軍事要塞化が進行、戦争の危機が拡大している。日中間は、日中共同声明、日中平和友好条約など4つの合意に基づき平和が守られていく。「韓国の人々も平和と民主主義のために決起した。中国、韓国などアジアの人々と協力して平和を守ろう！」と訴えた。

政党挨拶では、立憲民主党の柴田勝之衆院議員(東京比例)、「女性の95%が姓を変えている。一人ひとりの人権。アイデンティティにとって大きな問題だ。姓の選択を認め人権を尊重する。それが夫婦別姓だ。党は



▲ 国際連帯で石破政権打倒 (日比谷野音)

大阪では5月1日の早朝「第56回釜ヶ崎メーデー」が行なわれた。釜ヶ崎メーデーは、既存の労働運動からも切り捨てられてきた釜ヶ崎労働者たちが、「オレたちも労働者だ！」と声を上げ、1970年に「第1回釜ヶ崎メーデー」を行なったことに始まる。72年の第3回からは釜ヶ崎メーデーとして取り組まれ、全港湾・西成分

会と組織的にも運動的にも決別した闘いとして続いてきた。その釜ヶ崎メーデーも、今年で56回を迎える。会場である「秋小の森」には、100名を超える仲間が赤ハチマキ姿で集まった。また、「特掃」の紹介のため、労働センターに集まっている多くの仲間が目玉になる中、メーデー集合が行なわれた。集会後、三角公

大阪では5月1日の早朝「第56回釜ヶ崎メーデー」が行なわれた。釜ヶ崎メーデーは、既存の労働運動からも切り捨てられてきた釜ヶ崎労働者たちが、「オレたちも労働者だ！」と声を上げ、1970年に「第1回釜ヶ崎メーデー」を行なったことに始まる。72年の第3回からは釜ヶ崎メーデーとして取り組まれ、全港湾・西成分

会と組織的にも運動的にも決別した闘いとして続いてきた。その釜ヶ崎メーデーも、今年で56回を迎える。会場である「秋小の森」には、100名を超える仲間が赤ハチマキ姿で集まった。また、「特掃」の紹介のため、労働センターに集まっている多くの仲間が目玉になる中、メーデー集合が行なわれた。集会後、三角公

市民からの発言では、平和を求め軍拡を許さない女たちの会・熊本の海北由希子さん、「九州・京都・沖縄などで軍事拠点を進め、熊本では司法

(2面へ)

無念の思いを必ず晴らす

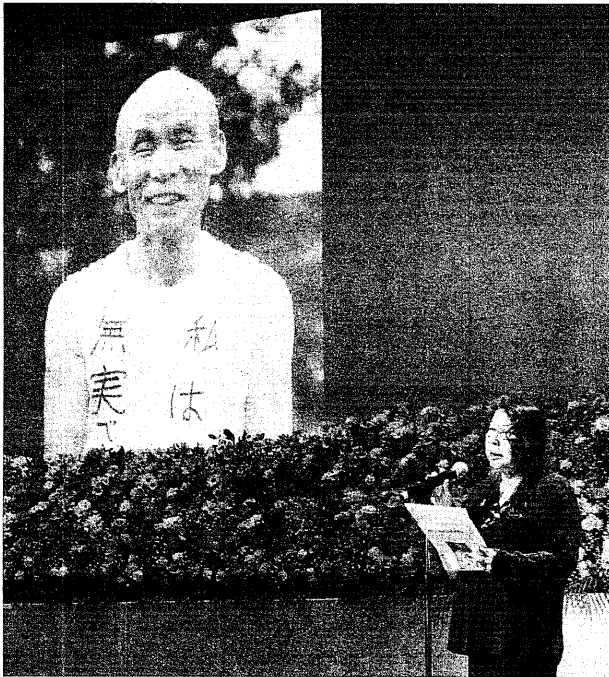
石川一雄さん 4・16 追悼集会に 1000 名

狭山市で 1963 年 5 月に女子高校生が殺害された狭山事件で、第 3 次再審請求中の今年 3 月に開始した石川一雄さんの追悼集会が 4 月 16 日、東京都内の日本教育会館で執り行われた。主催は、部落解放同盟中央本部と狭山事件の再審を求める市民集会実行委。

集会には、生前の石川一雄さんを偲んで 1000 名の支援者が参列、完全無罪まで闘い抜く決意を誓い合った。

一雄さんの思いを継いで、第 4 次再審請求を申し立てた妻の石川早智子さんは、次のように挨拶した。

一雄さんが生前に詠んだウグイスの短歌を紹介しつつ、「待ち続けたね。そして待ち続けたんだね。泣き言も言わずに、ひたすら冤罪を訴え続けたね。86 年の人生、やっと光が見えた矢



▲ 第 4 次再審闘争勝利を誓う (東京 4・16)
(写真は、『解放新聞』5 月 5 日号より転載)

先にとつてしまった一雄。無念だったね。」と故人に語りかけるに話し始めた。そして「これから自由を空を飛びながら見守ってほしい、あなたに会ってとても幸せだった」と結んだ。

部落解放同盟・西島藤彦中央執行委員長は、「3 月 11 日午後 10 時 31 分、誤嚥性肺炎で逝去された。4 月の三者協議では、事実調べが行なわれ、いよいよ再審の扉が開かれるのかとの矢先の訃報だった。狭山事件は部落差別事件であり権力犯罪だ。一雄さんの無念をかみ締めながら闘いを拡大し、必ず冤罪を晴らす」と遺影に誓った。

狭山再審弁護団・竹下政行事務局長は、「早智子さんが 4 月 4 日、第 4 次再審請求を東京高裁に申し立て、第 3 次請求審で審理中だった証拠 280 点を改めて提出した。いよいよ証人尋問と

いうところでの計報は、弁護団として悔しく残念でたまらない。高裁の担当は、第 3 次と同じ第 4 刑事部。速やかに望ましい結論を得よう全力を尽くす」と報告した。

静岡から駆け付けた袴田ひで子さんは、「何でこんな早く逝ってしまったのですか。今度は石川さんの再審だと信じていたのに。62 年間も闘っていたのに悔しい。今日は富士山が美しく見えた。その横で石川さんが笑っていた。今度こそ一雄さんの再審開始」と涙ながらに訴え、袴田巖さんとの親交に謝意を表した。

狭山事件の再審を求める市民の会・鎌田憲事務局長は、「再審法を变えることができる。第 3 次再審のさ中に石川さんは亡くなった。一雄さんにお詫びしたい。再審法改正の議員立法に向けて国会議員 384 名が立ち上

(1 面より)

令部の地下化が進んでい

った。今がその状況だ。健康駐屯地の弾薬庫に 1000 発ものミサイルを貯蔵せんとし、地対艦ミサイル部隊が配備されようとしている。我々は今、直接自衛隊との話し合いを求めている」と報告し、この件での 6・7 日本教育会館での集会参加を呼びかけた。

続いて、国民救済会の岸田さんが、通信の秘密を侵害する能動的サイバー防衛法案の危険性を訴え、「自衛隊が使用することも可能で、先制攻撃になる」と批判した。

行動には、韓国の社団法人「統一の道」からの連帯メッセージが寄せられた。それは、「労働者民衆の 123 日間の抗争で、平和破壊勢力の尹錫悦を罷免した。今韓国は、再び平和と民主主義の国になった。今年は光復 80 年。東アジアの平和のために力強く連帯して闘う」とアピールした。

最後に、憲法共同センターの高橋さんが以下を行動提起。

5 月 3 日、有明公園の憲法大集会
5 月 18 日、新宿駅東南口の街頭宣伝、午後 4 時
また 4 月 29 日には、大阪で石川さん追悼集会が開かれた。
(東京 O 通信員)

前号訂正

3 面・石川一雄さん計報記事の見出しで、「一雄」とあるのは「雄」の誤り。訂正し、深くお詫びします。

(3 面より)

反対は、共産といわな

どに限られた。18 日からは参院で審議入りした。能動的サイバー防衛法案は、①憲法 9 条に反する戦争遂行のための法律として提出された。

同法案は、2022 年末の岸田政権「安保 3 文書」の中の「国家安全保障戦略」に導入方針が明記され、それに則つて国会に提出された。日米共同作戦において米軍側が特に求めているのが、日本側のサイバー防衛であ

る。サイバー攻撃の予兆を把握して警察や自衛隊が、対象サイバーに入り込み、無害化する措置(能動的防衛)は、他国への先制攻撃とみなされる恐れがある。能動的サイバー防衛の日本一体化が進めば、戦争の危機がより高まる。政府は、同法案は自衛権、交戦権とは関係ないとしているが、電子空間がすでに戦場化しているのが世界の現実である。

また同法案は、②憲法 21 条 2 の通信の秘密を侵害する。それは、国民の通信情報を政府が常時収集し、のぞき見し、監視することを可能とする。当事者の許可がなくても、幅広い情報取得ができる。盗聴法はおもに有線電話が対象であったが、同法案では、メール・LINE・SNS の投稿などネット空間すべてが対象となる。

戦争準備の法律は、必ず人権制約を伴う。会期末は 6 月 22 日。参院立民の再考を求める。諦めることなく参院で廃案とさせよう。(O 通信員)

「(vi) 「尼港事件」と「4.5 事件」

「不意打ち攻撃するも日本軍の壊滅」

ロシア革命派は、1920 年 1 月から 2 月にかけて、ニコリスク、ウラジオストク、武市ハバロフスクに次々と入城し、白衛派を放逐する。日本軍は「全面撤退すべきだ」という革命派の勧告を無視し、「中立」を唱えて武市以外では居残し、そこでは革命派と日本軍が一時「雑居」する状態となった。

尼港(ニコラエフスク)とその周辺では、1 月 10 日ごろまでに白衛派は全て敗北し、尼港はパルチザン軍に包囲された。尼港の守備は日本軍が中心となる。日本軍は、陸軍が約 330 名、海軍は約 40 名の無線電信隊が駐屯していた。

尼港の石川守備隊長は、白水第十四師団長からの再三の訓令により、ようやくこれに従い、パルチザンとの和平交渉に入る。交渉は 2 月 28 日にまとまり、白衛軍は武装解除されること、日本軍はロシアの内政に干渉せず、局外中立を守る(武装については、何らかの制限があったと思われる)などが定められた。

パルチザン軍は、翌 29 日にニコラエフスク(尼港)市内に入る。日本軍とパルチザン軍との関係は、その内実とは異なるが、外見上は「一陰一陽の関係」ではなかった。悪化(日本軍の武装解除)は結局、解除されなかった。日本軍幹部はパルチザン軍本部をしばしば訪れ、会話を行なっている。

だが、日本軍の不意打ち攻撃は、翌 12 日の午前 1 時 30 分に始まった。日本軍はパルチザンの本部を包囲して、何人かの幹部を戦死させている(指導者のトリヤビーンも負傷するがすぐに移動され死にはしなかった)。そして、火を放つて燃やした。だが、パルチザン兵は民家など何力所かに分散していたので、一挙に壊滅とはならず、むしろ各所から応戦して日本軍に壊滅的打撃を与えた。日本軍の大部分は戦死する。日本領事館も攻撃され、石田領事(当時副領事)は自刃し、妻子もまた自決した。さらにパルチザン兵は、尼港市内の日本人を襲い、抵抗しなげな老幼男女も悉く(ことごとく)殺害した。兵営に逃れることができたのは 400 余名の居留民中僅(わずか)かに 13 名に過ぎなかったといわれる。なお、日本人居留民の男子も戦争に参加し、多くが戦死している。

「(4.5 事件)」

かねて準備を整えていた日本軍は、1920 年 4 月 4 日に、行動を起こす。その夜から、ウスキー(ハバロフスク)沿線を中心として沿海州内のすべての日本軍駐屯地

点で総攻撃に出たのである。明らかに 3 月の「尼港事件」に対する復讐戦である。同時に、4 月 5 日、パルチザン戦争の一翼を担っている朝鮮人を弾圧するために、ウラジオストク近くの新韓村を襲う。

また、シベリアでの新たな植民地拡大に失敗した日本は、日本軍の「守備範囲」を縮小し、既得権とみなした朝鮮支配を維持するために、朝鮮と国境沿いである満州の朝鮮独立運動の一大拠点である間島を襲撃する。10 月の間島出兵である。

日本軍は、「一九二〇年九月・十月に中国人馬賊を利用して北間島の彈丸(こんしゅん)県城を襲撃させ(彈丸事件)、これを朝鮮人が日本居留民を襲撃したと偽り、十月、第十九師団、シベリア出兵軍などを間島に出兵させた(間島出兵)。

金佐鎮(キムジャジン)が率いる北路軍政署と洪範圖の大韓独立軍などが連合して、日本軍を北間島(青山里)で撃破した(青山里の大勝)。

日本軍は、その報復に北間島一帯で約三〇〇〇人の朝鮮人を虐殺し、独立軍の北間島での活動は困難になった。(「糧谷の朝鮮」一武田幸男編 2000 年 P.26)といわれる。

シベリア出兵に失敗した日本軍は、朝鮮独立運動が拡大するのを恐れ、謀略工作を含めて弾圧を継続したのである。

宮海峽を挟んでサハリンの阿レクサンドル市の対岸となるデ・カリストに上陸する。日本軍の来襲を迎え撃つたのは、ソヴィエト派の三派連合である。三派とは、アナキスト、エスエル・マクシマリスト(最大限綱領主義者)、ボリシェヴィキである。

日本軍接近に恐れ、三派連合の中心人物・トリヤビーンらは敵方のロシア人などの戦闘員を次々と殺戮したが、3 月の「尼港事件」の際に捕らわれ投獄された日本人も、5 月 24 日、全員が虐殺されている。内訳は、陸軍軍人 108 名、海軍軍人 2 名、居留民 12 名の計 122 名である。さらにトリヤビーンらは、尼港脱出前、街に火を放った。5 月 30 日に一部、6 月 12 日にかけては大部分が焼き尽くされ、尼港は焦土と化した。

3 月の「尼港事件」の虐殺情報などが、次第に広く知られるようになり、パルチザンの農民達からも次第に嫌われるようになり、ボリシェヴィキ政権としても対処せざるを得なくなる。トリヤビーン、キャシコ、ジェレージンら 7 名は、7 月 9 日「人民裁判」で死刑となり、その夜のうちに処刑された。

「(vii) 緩衝国家・極東共和国の樹立と妥協

1920 年 3 月、さらには 5 月と「尼港事件」が、前述のように引き起こされた。日本の為政者は報道管制をしながら「尼港事件」を徹底的に反ソ・反革命の宣伝扇動に利用した。そして、「責任ある政府」が成立し、

この事件に関する「相当の報償謝罪をなすに至る迄」の保障と称して、北サハリンを 7 月に占領する。しかし、日本軍のロシア農民や朝鮮人の虐殺などについては一言もなく、知らん顔であった。

1920 年 4 月 6 日、ザバイカル州西部で、極東共和国の成立が宣言された。これは、ボリシェヴィキのみならず、エスエル、メンシェヴィキなども参加したもので、ソヴィエト側は日本軍との衝突を避けるための緩衝国家として設立した。

ボリシェヴィキ政権としては、国内では、「戦時共産主義」による農産物割当徴発制が農民から不評を買い、しばしば反乱を招いた(1921 年 3 月の第 10 回党大会で、ネップに政策転換するとともに、現物税に切り換えた)。国外では、対ポーランドの革命戦争(1920 年 4 月 10 月)が頓挫し、世界革命は遠のいた。

他方、日本側でも、国際的孤立がさらに深まり、国際世論の集中的批判を恐れ、5 月初頭、田中義一陸相が、東進するソヴィエト軍とのあいだに緩衝地域を設けるよう現地軍司令官に訓令を発している。

日ソ双方の弱点の露呈で、共に妥協せざるを得なくなった。だが、日本軍の撤退は、結局、1922 (大正 11) 年 10 月までなかった。

10 億円の軍事費を浪費し、3000 人の死傷者を招き、シベリア出兵は完全な失敗に終わったのである。ただし、北サハリンからの撤退は、その後の 1925 年である。(つづく)

広がる先住民族の闘いと深まる先住権思想②

維新らしいの侵略路線の初挫折

堀込 純一

VIII 根強いアイヌ差別の歴史的背景 (続)

(5) 初めての大きな挫折に直面したシベリア出兵

出兵前からの特務機関の策動

1917年11月7日(露暦では10月25日)、ロシア10月革命が勃発すると、日本軍部はこれに乗じて、アジアでの更なる侵略拡大の野望を明らかにする。それは、参謀本部が「居留民保護ノ為(ため) 極東露領(ロシア領)ニ対スル派兵計画」と題したものである(同年11月中旬)。この計画は「北滿及(および)沿海州ニ於ケル要地を留ノ日本臣民ヲ保護シ併(あわ)セテ爾後(じこ)取ルコトアルヘキ作戦行動ヲ準備」することを目的として、「沿海州に臨時編成の混成約一旅団を派遣し、主力を浦潮(ウラジウス)に、一部をハバロフスクその他の要地に配置するとともに、北滿州にもほぼ同数の兵力を派遣、主力をハルビンに、一部をチチハルその他の要地に配置する」(原暉之著『シベリア出兵』筑摩書房 1989年P126)というものであった。

そして、1918(大正7)年1月、2軍艦(朝日、石見)をウラジウスに派遣し、4月には陸戦隊を上陸させ、極東ロシア最大の国際都市の掌握を明らかにする。また、同年2月25日には、シベリア・コサックの首領(アタマン)セ・ミョーノフを軍事的・財政的に援助することを閣議決定する。

期、オーストリア・ハンガリー帝国によって、植民地のチェコ人とスロヴァキア人も軍隊に動員されたが、彼等は戦わずしてロシア軍に投じ、やがて独自にチェコスロヴァキア軍団(4万5千人)を編成する。そして、ロシア軍とともに東部戦線で独逸軍と戦う。10月革命後、軍団は西部戦線で戦うことを希望し、マサリク(独立後の大統領)の奔走により、ウラジウス・コサック経由で西欧に帰ることが許された。軍団はシベリア鉄道で帰ることとなるが、5月末段階で、ウラジウスからウラジウス・コサックの間をシベリア鉄道で移動中であり、ペンザに8000名、チェリヤピンスクに9000名、オムスク・イルクーツク間に11000名、ウラジウス・コサックに10000名を数えた。

日本軍はシベリアにむけて出港するが、同時に国内は「米騒動」の真つ中であった。前年から高騰していた物価は、「シベリア出兵」でさらに高騰した。1918年の7月下旬、富山県魚津町の漁民の「主婦」たちが、米の廉売と県外移出差止めを厳しく要求して決起した(男たちは出稼ぎに出ていたが、不景気で帰郷の交通費にさへ困った)。この動きは、同県の各地に広がり、米穀商と資産家を襲い、警官隊との衝突へと発展する。

庄は「軍隊に対する民衆の反感と違和感を高め、……出征兵士を見送る光景にも変化がはつきりと現れた。人びとは今や冷淡であり、兵士は自分自身が万歳を唱えることで、出征する我が身を励まされねばならなかった。」(原暉之『シベリア出兵』P22)のである。

要地・スヴォボドノス(「武市」の北方)からさらにゼーヤ河の上流で、セレンジャ河との合流点にマザノヴォ村がある。1919年1月10日、その農民たちは日本軍の暴力に耐えかね、近隣の農民とともに蜂起し、その地の日本軍を襲撃し、勝利する。

その日本軍を救援するために、スヴォボドノスからゼーヤ河沿いに上ったマエダ隊である。「道中、日本軍は手当たり次第に村々を焼き、無防備の農民を銃殺した。一月一日正午頃、日本軍は蜂起民が明け渡したマザノヴォ村を占領した。一月三日の未明、すでに蜂起民は引き払っており、村民は和平代表団を送ったにもかかわらず、マエダの部隊はソハチノ村を襲撃した。日本軍は代表団と女子供を含む逃げ遅れた全村民を徹底的に焼き尽くした。」(原暉之著『シベリア出兵』P22)のであった。

だが1919年2月、日本軍部隊が全滅する事件が起こった。日本軍が、武市の蜂起に呼応し、州都の武市に攻め入ろうと計画していたイヴァノフカ村(武市より東方約36キロ)のバルチザン部隊を追い詰めようとする。だが、逆に地形を熟知するバルチザンによって袋の鼠(ネズミ)となり、2月25日から26日にかけてアレクセイ・エフスクの西方、アムール鉄道ユフタ駅付近の戦場において、田中勝輔少佐の率いる歩兵七十二連隊第二大隊が全員戦死し、救援に向かった日本兵も負傷兵5名を除き他は悉く戦死した。日本側の戦死者数は、合わせて280名にのぼった。(原暉之著『シベリア出兵』P473)

